令和8年度　日野市平和事業

平和派遣事業成果報告書

＜沖縄・長崎・広島＞



日　野　市

目 次

1 平和派遣事業の趣旨・目的 1

2 平和派遣事業概要 1

3 平和派遣事業報告会 1

4 日野市学芸員による平和講話会 2

●派遣者発表 沖縄

中学校 2年 安部(あべ) 澄玲(すみれ) さん 4

中学校 2年 岩岡(いわおか) 文乃(あやの) さん 6

小学校 3年 山田(やまだ) 陸翔(りくと) さん 8

●派遣者発表 長崎

小学校 5年 佐藤(さとう) 彩(あや) さん 11

●派遣者発表 広島

小学校 3年 井野(いの) 伶菜(れいな) さん 14

小学校 6年 梅田(うめだ) 光一(こういち) さん 16

中学校 3年 遠藤(えんどう) 由創(ゆうそう) さん 18

小学校 4年 河西(かさい) 里奈(りな) さん 20

中学校 3年 加藤(かとう) 杏実(あみ) さん 22

小学校 5年 柴田(しばた) 未彩(みさ) さん 24

来場者アンケート 26

日野市民憲章／日野市核兵器廃絶・平和都市宣言 28

1　平和派遣事業の趣旨・目的

平成 26 年から始まった日野市平和派遣事業は、第二次世界大戦下で多大な戦火に遭った「広島」「長崎」「沖縄」の各所に、市内在住の小中学生及びその保護者を派遣し、平和について学んでいただく事業です。

また、学んでいただいた内容を発信し、広く市民と共有していただくことで、二次的な平和意識の伝播を促進し、日野市民全体への平和意識の啓発を図っています。

2　平和派遣事業概要

派遣期間　令和8年7月～8月
派 遣 先　沖縄、長崎、広島
派 遣 者　下表のとおり

（発表順、敬称略）

派遣先	派遣児童生徒
沖縄	安部　澄玲
	岩岡　文乃
	山田　陸翔
長崎	佐藤　　彩
広島	井野　伶菜
	梅田　光一
	遠藤　由創
	河西　里奈
	加藤　杏実
	柴田　未彩

3　平和派遣事業報告会

お集まりいただいた皆様に、派遣された皆様の思いを発表していただきました。発表された生の声に、参加者はそれぞれ平和への思いを馳せました。

日　　時　令和8年9月 13 日(日)
会　　場　多摩平の森ふれあい館　集会室6





4　日野市学芸員による平和講話会

　平和派遣事業報告会と同日に開催。私たちの暮らす日野のまちにどのような戦争の影響があったのかを解説する、日野市学芸員による講話会を開催しました。

　また、講話会会場に隣接する集会室5にて、原爆被害等を疑似体験できるVRゴーグル体験会等実施しました。

日　　時　令和8年9月 13 日(日) 14 時50 分から 15時 30 分まで
場　　所　多摩平の森ふれあい館 集会室6
講　　師　日野市郷土資料館学芸員 秦 哲子(はた さとこ)
参 加 費　無料
参加人数　61 人

「講師プロフィール」
日野市内の戦跡や遺品の調査、地域の歴史・文化財に関する研究を行っています。



日野市学芸員による講話会の様子





原爆被害等を疑似体験できるVRゴーグル体験会等の様子

●派遣者発表 ≪沖縄≫





Ｉ　中学校　　２年　　安部 澄玲 さん

【沖縄戦とは？】
沖縄戦とは、太平洋戦争の最終段階であり、1945 年３月下旬から７月にかけての戦いのことを言う。この約 90 日間にわたる沖縄戦によって、日本兵 6 万 6 千人、沖縄出身兵 2 万 8 千人、米兵1万 2 千人、一般住民 9 万 4 千人が犠牲になった。



写真-糸数アブチラガマ入口

沖縄では深い縦の洞穴を「アブ」、崖のことを「チラ」、洞穴やくぼみを「ガマ」という。私が訪れた糸数アブチラガマとは、沖縄本島南部の南城市玉城字糸数（なんじょうしたまぐすくあざいとかず）にある全長 270 メートルの自然洞窟のことである。

沖縄戦では、住民の避難指定場所や、日本軍の地下陣地・倉庫としても使用された。しかし、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室と変わった。1945 年 5 月 1 日からは軍医や看護婦、ひめゆり学徒が配属され、約 600 名の負傷兵が運び込まれてきたという。多くのガマでは出入口から一番近いところに住民が避難していたそうで、糸数アブチラガマも同様に出入口付近には住民らがいた。



図-糸数アブチラガマ見取り図
出典・糸数アブチラガマホームページ

一つ目が、住民たちが避難していたところの反対側に位置する場所でのことだ。そこには脳症患者や破傷風患者、つまりもう生きられないと判断された

負傷兵たちがいたという。ガイドをしてくださった方はそこにつくと、懐中電灯を消すように言った。懐中電灯を消すと、そこは真っ暗闇だった。何日も何日もここに放置された負傷兵たちがどんなに苦しかったのかを考えては戦争の残酷さを改めて感じた。

二つ目は、ひめゆり学徒の話だ。特に覚えていることは、だんだんと彼女たちは人間の心を忘れていったと話していた。傷口にわくウジや切断される足や腕。それに重なり、睡眠も食事も十分にとれていない。私が想像もできないほど辛い日々を送っていたのだということを知ることができた。一方で、解散命令が下されるまで糸数アブチラガマでのひめゆり学徒隊の犠牲はなかったとガイドをしてくださった方は話していた。その理由は、糸数アブチラガマには井戸があったことが関係しているという。普通、水の確保には外に出なければならない。しかし、ここではその必要はなかったのだ。水の大切さ、また解散命令後の悲惨さを目の当たりにした。

他にも、ひめゆり平和祈念資料館や旧海軍司令部壕を訪れた。

ひめゆり平和祈念資料館では、糸数アブチラガマで知ったことからより深くひめゆり学徒隊のことを知ることができた。

旧海軍司令部壕では、自決による生々しい痕跡を見て戦争に対して恐怖を感じた。



写真-ひめゆりの塔

【まとめ】

残酷な戦争の中に生き残った人もいるということを知れたのはとても貴重な体験だった。生き残った人がいなければここまで語り継ぐことはできないということを改めて感じた。これからも平和について考え続けていきたい。

２　中学校　　２年　　岩岡　文乃　さん

『ひめゆりの塔を訪れて』

生まれて初めての沖縄！
行くなら一度は足を運んでみたいと思っていた「ひめゆりの塔」と
「ひめゆり平和祈念資料館」を訪問した記録と感想を報告します。

皆さんも名称は聞いたことがあると思いますが、私もたくさんの
女学生たちが戦火の犠牲になった場所ということしか知りませんでした。

実際に訪れて当時の体験談や資料を見聞きしてみると、想像を絶する
出来事の数々に驚き、戦争の悲惨さを改めて感じました。
特に印象に残ったのは、私と同年代の女学生たちが負傷兵の看護や
身の回りの世話など体力的にも精神的にもつらい仕事をしていたことです。
銃弾が飛び交う中で食料を運んだり、亡くなった人を埋葬したりするなど
常に死と隣り合わせだったことを知り、胸が痛くなりました。

また、ガマという防空壕に爆弾が投げ込まれ自分以外の人が亡くなってしまった時、
親友だった子が最後まで自分の手を握ったまま亡くなっていったという話が
特に強く心に残りました。自分と同年代の子が目の前で大切な友人を失った
ことを考えると、言葉にできないほど苦しい気持ちになりました。

資料館には犠牲になった一人一人の写真や説明があり、みんな私たちと同じように
個性があり、これからの未来に希望を持っていた学生だったのだと実感しました。
また資料館前に現存するガマの前まで行くと、想像以上に深く暗くじめじめしていて、
そこで過ごしていた人々の恐怖をヒシヒシと感じました。



「なぜ、なんの罪もないこの子たちがこんなひどい目に
遭わなければならなかったのだろう」と強く感じました。
【戦争は、たくさん人が死ぬだけで誰も得をしない】

誰のためにもならない戦争を、もうこの世界で起こさない社会を
私たちがつくっていかないといけません。

今回実際に見て、聞いて、知ったことで、平和は当たり前に
あるものではないと改めて気づきました。
今も世界では戦争が起きています。今回学んだことを忘れず、
まずは「知ること」から、平和について考えていきたいです。







３ 小学校　　3年　　山田 陸翔 さん

沖縄に行って

僕は、平和派遣事業で沖縄へ行きました。まず、対馬丸記念館に行きました。僕と同じくらいの年の子達が、この対馬丸に乗って親から離れて疎開しました。僕だったら家族と離れるのは嫌です。攻撃された時、みんなびっくりして急いで逃げようとしたと思います。お父さん、お母さんがいなくてとても怖かったと思います。

次に、旧海軍司令部壕に行きました。ここは、4000人もの兵がいた場所です。たった5カ月で人の手で作ったと思えないくらいにきれいでした。壕の中は暗くて外の様子が全くわかりませんでした。印象に残っているのは信号室で、モールス信号を使って外部と連絡を取っていたそうです。約2900通も信号を送り、戦争に勝つまで諦めずに戦っていたのがよくわかりました。

次に、ひめゆり祈念資料館に行きました。戦争で傷ついた人達の手当てをする女子学生がいた場所です。病院にいたのに突然解散命令が出され、避難した壕を攻撃されてたくさんの人が亡くなりました。戦争の様子もわからず、一生懸命手当てをして、突然解散と言われてとても困っただろうし、どうすることも出来なかったと思います。自分の楽しみもなくかわいそうでした。

それから浦添城跡にも行きました。とても景色の良い場所でした。それなのに、たくさんの壕があって、ここでも戦争があったのだな、と悲しくなりました。

僕が沖縄にいる間に台風が来ました。コンビニからおにぎりがなくなり、ホテルから2日間出られませんでした。それだけでも、ごはんを食べられること、家族で出かけられることが当たり前ではないと感じました。戦争中だったら、怖さもあって本当に苦しかったと思います。

沖縄で見たこと、聞いたこと、感じたことを先生や友達に伝えて、平和の大切さを広げていきたいです。


對馬丸記念館


場内禁煙
NO SMOKING



●派 遣 者 発 表 ≪長崎≫





４ 小学校　　５年　　佐藤 彩 さん

私は、8 月 3 日に長崎市の原爆資料館に行きました。きっかけは、兄が 3 年前に、平和派遣事業で広島に行き学んだので、親から勧められたからです。

最初に、平和公園に行きました。公園は高台にあり、エスカレーターを登ると、泉がありました。原爆により大やけどを負った人々が、水を求めたことから、水があふれ出るこの泉を造ったそうです。奥に進むと、平和祈念像がありました。この像は、戦争の 10 年後に、原爆の怖さを忘れず、世界の平和を願う象徴として、造られました。空に伸びている右手は、原爆の恐ろしさを表し、水平に伸びている左手は平和を表しているそうです。

次に、原爆資料館に行きました。そこでは、ボランティアガイドの森さんに、原爆のことを教えてもらいました。

最初の部屋には、時計がありました。その時計は、原爆が落ちた時の時刻、11 時 2 分を指して止まっていました。

1945 年 8 月 9 日、アメリカの B29 は、長崎市に原爆を落としました。原爆は、9000 メートルの高さから落とされ、上空 500 メートルで炸裂しました。かかった時間は 45 秒間で、人々は逃げるひまもありませんでした。

その年の 12 月までに、長崎市の人口 24 万人のうち、約 7 万4千人が亡くなり、約 7 万 5 千人がけがをしました。

また、その部屋では、被爆直後の町の様子が再現されていました。私は、その中で火の見やぐらに衝撃を受けました。なぜなら、下が鉄でできているのに、折れ曲がっていたからです。

次の部屋には、長崎の地形の模型がありました。長崎市は三方を山に囲まれた、すり鉢(ばち)状の地形です。模型の上に映像が映し出され、被害が広がった様子を見ることができました。森さんのお話では、爆心地の近くに学校がいくつもあり、多くの児童が亡くなったそうです。自分と同じくらいの子供も、たくさん亡くなってしまったと知り、悲しくなりました。

放射線による被害の展示も見ました。嘔吐やげり、発熱、皮下出血、白血病やガンなどの症状が現れることを知りました。熱線や爆風を受けなくても、放射線で亡くなった人がいると知り、恐ろしいと思いました。

私は戦争や原爆のことについて、何も知らなかったので、現地で学べてよかったです。私は戦争をして欲しくないです。今回学んだことを、友達に伝えていきたいです。















● 派遣者発表 ≪広島≫



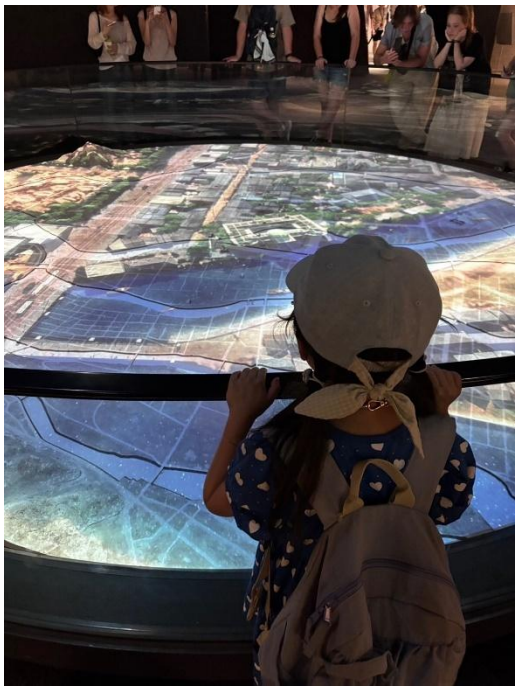


５ 小学校　　３年　　井野 怜菜 さん

私は『つるにのって』の本をよんだことがきっかけで、今回の平和はけんじぎょうにさんかしました。広島平和きねん資料館と平和きねん公園そして本川小学校 ３ かしょを見学しました。

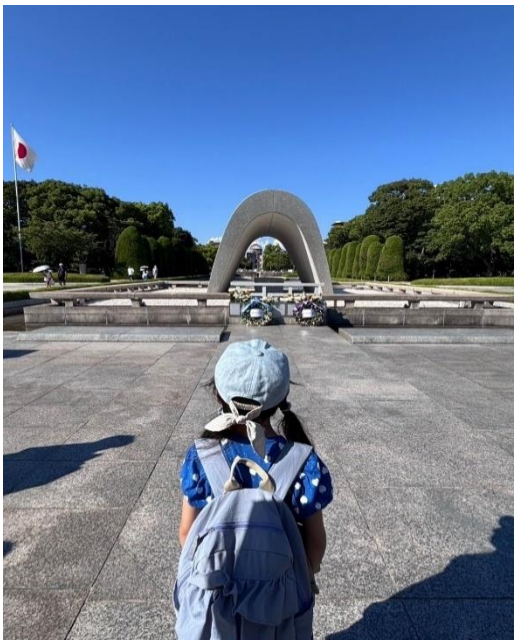
資料館では、げんばくが落とされたときの写真や、ひばくした人たちが身につけていた服、小さなこどもたちも死んでしまったことなどたくさんの事が書いてありました。本で読んだ世界が、目の前にあって死んでしまった人たちはどんなにつらかっただろう、くやしかっただろう、こわかっただろう、かなしかっただろうと思うとかわいそうでおなかがいたくなりました。





平和きねん公園では、さだこさんの「げんばくの子のぞう」や平和のともしびを見学しました。さだこさんはげんばくから助かり元気にくらしていたのにほうしゃのうのえいきょうであとから死んでしまった人のひとりです。さだこさんのけいけんしたことは、きっと私たちには全部はそうぞうができません。それでもぜったいにつたえていかないといけないと思いました。平和のともしびはずーっともえ続けています。わたし達のきもちみたいだなと思いました。





本川小学校のきゅう校しゃのてんじでは、資料館とちがって「ここに本当にあったんだ」と思ったらかわいそうだけじゃなくてとてもこわく感じました。ふにゃふにゃになったがらすびんやこげたドアのわくがすごくこわくてこわくてむねがぎゅっとなりました。そして今の私たちが学校に行けてごはんを食べられる生活が、どれだけしあわせかをかんじました。





私は、今こうして平和にくらしていることにかんしゃして、これからも家族やお友だちと仲良くすごしていきたいです。

６ 小学校　　６年　　梅田 光一 さん

父よ、母よ、弟よ、妹よ、そして永い間はぐくんでくれた町よ、学校よ、さようなら。本当にありがとう。こんなわがままなものを、よくもまあほんとうにありがとう。僕はもっと、もっと、いつまでもみんなと一緒に楽しく暮らしたいんだ。愉快に勉強し、みんなにうんと恩返しをしなければならない。 ― こうやってみんなと愉快にいつまでも暮らしたい。喧嘩したり争ったりしても心の中ではいつでも手を握りあって ― 人生二十年。余生に費やされるべき精力のすべてをこの決戦の一瞬に捧げよう。 ― みんなさようなら。元気で征きます。

このお手紙は、水中特攻兵器「回天」の搭乗員となった塚本太郎さんが出撃する前に家族に自分の声を録音して残したものの一部です。

今回の広島への旅で訪れた大和ミュージアムでこの遺書に出会いました。大和ミュージアムでは、戦艦大和の10分の1模型や水中特攻兵器「回天」についての展示などを見てきました。



水中特攻兵器「回天」

当時の日本の最高の技術をつぎ込んで作られた戦艦大和は沖縄での戦いに向かう途中に撃沈されて3000人以上の犠牲者を出します。さらに衝撃だったのが水中特攻兵器 「回天」の存在でした。僕は、特攻で出撃した塚本さんの声を聴いて、本当はとてもこわいし家族のところに元気に帰りたかったんじゃないかと、とても悲しい気持ちになりました。そして、こんな兵器を作って人の命を粗末に扱うなんて許せないなと思いました。

広島平和記念資料館では、原爆が投下される前のにぎやかな広島の町の写真や原爆投下された8時15分で止まった時計、原爆投下後の変わり果てた広島の町の写真や被爆者の様々な遺品が展示されていました。中には目を背けたくなるようなつらく悲惨なものもありました。

僕と年の近い被爆して亡くなった13歳の男の子が来ていたボロボロになった服を見て、どんなに痛くて怖くて苦しかっただろうと思うと胸が苦しくなりました。そして、焼けこげた三輪車を見た時、どこまでも残酷な原爆を絶対に許してはいけないと強く思いました。原爆は三輪車に乗っていた何も知らない3歳の男の子の命も一瞬で奪いました。

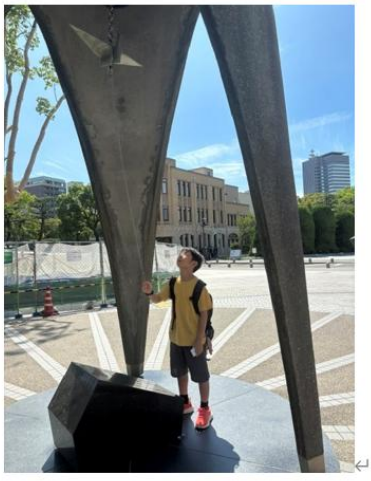
広島の原爆が投下された年に被爆が原因で亡くなった人は14万人と言われています。その一人一人に大切な家族がいて、大好きな友達がいました。今の僕たちにも大切な家族や友達がいます。一人一人がそれぞれ大切な命だということを絶対に忘れてはいけないと思いました。それを忘れないこと、そして、戦争で幸せは生まれないこと、核兵器はもう2度と使ってはいけないこと、「ノーモアヒロシマ」の思いを友達やこれから出会う一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。



被爆した三輪車



原爆ドーム



原爆の子



平和の灯

７ 中学校　　３年　　遠藤 由創 さん

今回僕は、広島に「平和と復興」をテーマに視察に行きました。
広島には原爆ドームをはじめとした戦争の爪痕が街中に残っていまたした。原爆の爆発でも倒れなかった銀行や小学校はもちろん、少し歩くとあちこちに慰霊碑が建てられ、あの虐殺で亡くなられた方を今でも弔っていました。しかしそうして未だに被害の爪痕が見られるほどの大きな犠牲があっても、広島の人たちは力強く生きて、復興してきたのだということもまた実感しました。以下に僕が見てきた復興の様子を紹介します。

・路面電車
広島市内を走る路面電車は、原爆が落ちた３日後から走り始めました。原爆の被害で重症の市民を、郊外の病院までお金も取らずにひたすら運び続けたそうです。そうして広島復興の足がかりとなった路面電車は、今も地域の人たちの重要な生活の足として活躍しています。実際に僕も乗ってきましたが、市内をめぐりやすかったし、本数も多かったので利用も便利でした。

・広島カープ
広島カープという野球チームは、広島市民が産み育てたチームです。原爆が落とされてから ４ 年後に結成され、何度か存続の危機もありましたが、広島市民がお金を出し合い支えてきたそうです。地下道にはこれまでの変遷を記した壁紙があり、公園にはリーグ優勝した年が刻まれた記念碑もありました。お店の中にはカープグッズがあったり、カープのデザインのナンバープレートを付けている車もあり、今でも市民に愛されているんだと 実感しました。また、地元民であるコーヒー店のご店主が「自分の親父も 募金した。カープは好きとかそういうんじゃなく、我が子のようで『かわいい』という感覚なんよ」と仰っていました。

・お好み焼き
今では広島を代表する食べ物として全国的に知られていますが、その始まりには戦後の人々の暮らしがあります。戦争によって食べ物が不足していた中で、アメリカ軍が支給する小麦粉と当時安かったキャベツを使って子供たちに少しでも栄養のあるものを食べてほしくて作られました。また、出来上がりまでの待ち時間にお客さんどうしで話をすることで地域コミュニティの形成に役立ちました。今でも常連さんがよく来ていて、地域支えていると感じました。

・復興を支えた企業
被爆後も街を支えた企業がありました。
車の会社マツダは３輪トラックを開発して移動を便利にしました。
銀行も特別な利子をつけて、市民にお金が行き渡るようにしました。
気象館は街が壊れ中央との連絡手段が無くなっても観測をし続け、原爆投下から一ヶ月後にあった記録的な台風からも市民を守りました。

・復元された歴史
　原爆で街は一瞬で無くなりましたが、昔からある広島城の天守閣や原爆ドームの近くにあった頼山陽氏の居室などが復元されて、歴史を途切れさせずに繋いでいました。

　今回の視察で広島に初めて行き、東京の日差しとは全く違う刺すような日差しを実感してきました。あの日差しの下で起こされた惨劇はどれほど辛かったか、正直想像もできません。しかし、原爆投下で焼かれてしまってもその後に新芽が芽吹いて今では大きく立派に育っている頼山陽史跡資料館内にあるクロガネモチの木に象徴されるような広島市民の力強さを実感してきました。広島市民が協力しあって住みやすい街にしてきたように、僕も地域の方と協力しあって日野市をより良い街にして平和を維持していきたいと思います。

〈見学・取材場所〉
護国神社、広島城、昭憲皇太后御座所跡、江南山気象館、原爆ドーム、平和記念公園、広島平和記念資料館、国立原爆死没者追悼平和祈念館、袋町小学校平和資料館、旧日本銀行広島支店、頼山陽史跡資料館、Pride of Hiroshima、おりづるタワー、高射機銃陣地跡、薬研堀八昌、コーヒーストーリー







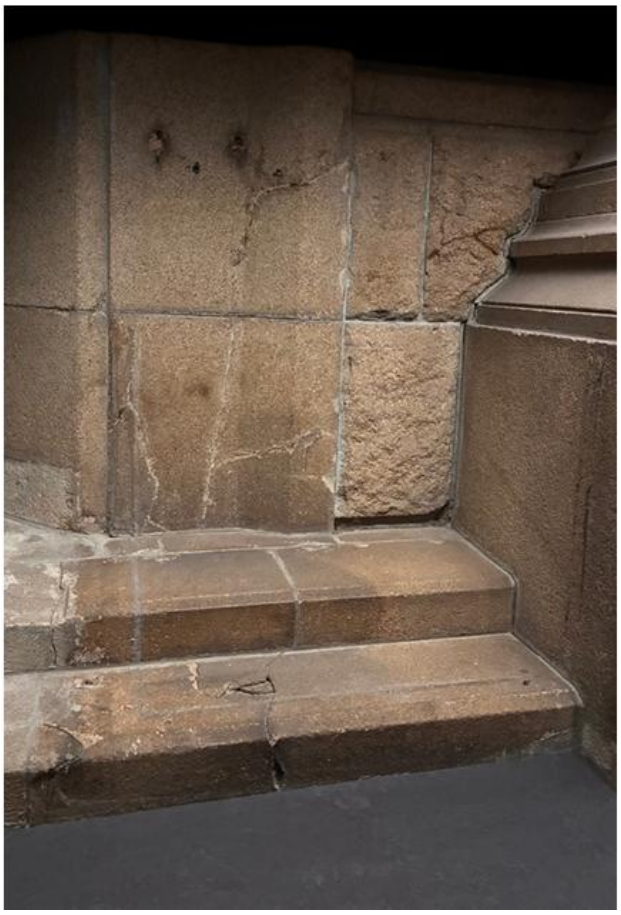




８ 小学校　　４年　　河西 里奈 さん

今回、平和はけん事業で広島に行くことになり、平和記念公園や原爆資料館には何があるんだろうと思いました。戦争は怖いものだと思っていましたが、実際にどんなことが行われていたかはわかりませんでした。実際に行って学んだことや感じたことを書いていきたいと思います。

原爆資料館では、色々な展示物を見て原爆の恐ろしさや生き残った人たちの思いを感じました。下の写真は、銀行の入り口の階段です。銀行の開店前に階段に座って並んでいた人が、近距離に原爆が落ち、逃げることもできないままその場で亡くなったそうです。原爆の強烈な熱で座っていた部分が影のように黒く残っているのをみて、恐ろしいと思いました。また、「変形してしまったびん」は、あんなに硬い瓶が、ぺったんこに変形してしまっているのを見て、原爆が落とされた後の火災の悲惨さを感じました。その場にいた人たちがどんなに熱く苦しかったかを思うと胸が苦しくなりました。そして、「しんちゃんの三輪車」が展示されていました。原爆でねじれてしまった三輪車を見て、楽しく遊んでいたのにそれを一瞬でうばった原爆が怖いし、二度と同じことが起こらないでほしいと思いました。でもしんちゃんが亡くなったときに家族がしんちゃんと一緒に三輪車をうめてあげたのがやさしいと思いました。







その後、平和記念公園を通って、原爆ドームに向かいました。原爆ドームはとても壊れていて原爆がとても恐ろしいものだということが改めてわかりました。平和記念公園の慰霊碑に書いてあった「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから」という言葉から原爆で生き残った人から亡くなった人への想いと平和への強い気持ちを感じました。公園は、とても広く、緑も多くて、歩いていたら、生き残った人の平和への思いが多くの人に伝わるといいなと思いました。





広島で乗ったタクシーの運転手さんの話では、原爆が落とされた8月 6 日は広島の小中学校は登校日だと聞きました。どんなことをするのか疑問に思ったので広島に住む親戚に聞きました。登校日は 8 時 15 分に黙とうをするそうです。これは広島に8月6日の8時 15 分に原爆が落とされたからです。その後は平和について学び、感想を書いて下校するそうです。それを聞いて私は今まで戦争でどんなことが行われていたかや原爆が落されていたかを知らなかったけれど、広島では小さい頃から平和について学び考えていたことを知り、これから私も過去に日本でどんなことが起こり、今現在の平和が作られてきたのかを学習し、この平和な日本が続いていくために必要なことはなんなのかを考えていきたいです。そして、世界中が平和であってほしいとも思います。まずは今回学んだことを、妹や友達など身近な人に話していきたいです。

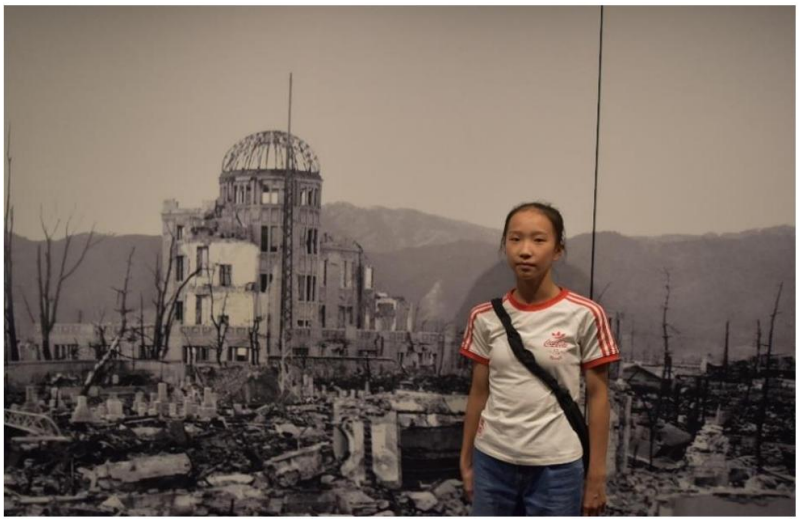
９ 中学校　　３年　　加藤 杏実 さん

今回、私は平和派遣事業で広島に行きました。姉も平和派遣事業に参加したことがあり、以前、広島に行って戦争の恐ろしさを目のあたりにしました。そして自分自身が授業で戦争について学び、当時よりも知識が増えた今、現地の人々はどのような被害を受け、何をこれから社会に伝えていかなければいけないのかを学びたいと思い、再び広島に行くことにしました。

1945 年 8 月 6 日、家を出発し学校へ登校する子供たち、路面電車は通勤客を乗せて走り、いつも通りの毎日が始まるはずでした。

8時 15 分、アメリカ軍により広島に原爆が投下され、その幸せは一瞬で消えてなくなってしまいました。

原爆の爆風により建物は一瞬で崩れ、爆発や熱波により多くの人々の命が奪われました。また、戦争を生き延びた人たちも、放射線の影響で数十年後に体調をくずし亡くなる人も多くいました。





今回、私が印象に残った事は、旧広島逓信病院外来棟平和資料館で学んだことです。

こちらの病院は爆心地から 1370mの距離にあり、全壊全焼せず建物の一部が残っていたため、助けを求めてくる被爆者を受け入れて治療しました。医師や看護師たちは、自らも足に窓ガラスの破片が刺さっていたり、やけどをおっていながら、一生懸命 救護活動にあたりました。医療機器は原爆の影響で壊れており、廊下にはたくさんの人であふれていたそうです。少しでも多くの命を救うために暑い昼間も、夜間もできる限りの治療が行われました。

自らも大切な家族や友人を奪われ、くじけそうになりながらも原爆と戦い続けた病院の職員たちは正義感があり、とてもかっこいいと思いました。そして、私の将来の夢は医療従事者になることです。当時の職員の人たちのように、少しでも自分が誰かの力になれるようになりたいです。

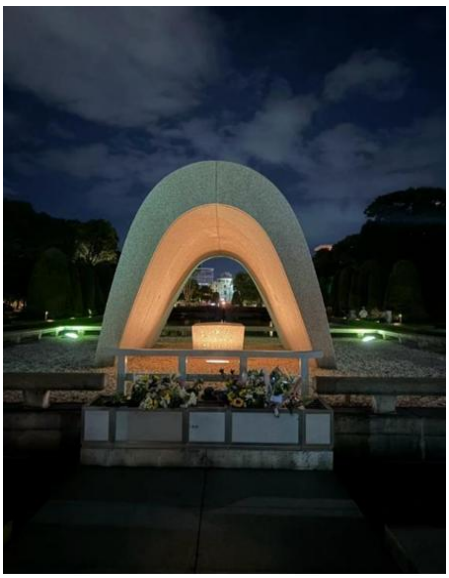




もう一つ印象に残った事は、大和ミュージアムでの人間魚雷の展示です。
特攻隊として一人で人間魚雷に乗り、相手の船に自ら突撃します。とても狭く暗い操縦室に乗り、自らの命を犠牲にして国のために戦う。特攻隊の人たちの気持ちを考えると、胸が張り裂けそうな思いでした。
そして、このように簡単に命を投げ出す事は現代に生きる私には理解できませんでした。

なぜ日本に原爆が落とされたのか、それは核兵器の威力の実験をするためでもあったそうです。
当時、広島は軍事拠点の一つであった事、大きな空襲を受けておらず原爆の効果を確認しやすい事から選ばれたそうです。
広島以外の候補地としては小倉・京都・新潟などが挙がっていたそうです。その中で新潟は私の祖父母の実家があります。
もし新潟県に原爆が落とされていたら、私は生まれていなかったかもしれません。
私は「多くの人々が、なぜ実験のために殺されなければならなかったのか」を強く疑問に思いました。

同じ悲劇を二度と繰り返さないため、今、生きている私たちがこれまでの広島での出来事を知ることが大切だと私は考えます。
戦争について調べ、家族で話すことは、戦争の恐ろしさも学ぶことに繋がると私は思います。
勉強ができて、友達と遊べて、家族と笑いあって過ごすことができるのは当たり前ではありません。平和な毎日が続くように、今回学んだことを周りの人たちに伝えていきたいです。



１０　小学校　　５年　　柴田　未彩　さん

１ はじめに



　私は初め、戦争や原爆について、広島や沖縄、長崎で起きたことだし、昔のことだから関係ないと思っていました。

　しかし、広島に行って、それは間違っていたことに気付きました。それには二つの理由があります。

２ 学んだこと

　一つめは、3歳の男の子の三輪車の展示です。その展示は、被爆して亡くなった伸一ちゃんの、焼け焦げて変形してしまった三輪車です。当時まだ3歳だった伸一ちゃんが被爆して亡くなってしまったとき、お母さんは伸一ちゃんが一人でお墓に入るのはかわいそうだから、伸一ちゃんが大好きで、被爆したときにも遊んでいた三輪車も一緒に入れてあげようと考えたそうです。この展示から、伸一ちゃんやお母さんが原爆が落とされたその夜に、どれだけつらい思いをしていたか、お母さんがどれだけ伸一ちゃんのことが好きだったかが、伝わってきました。原爆は、多くの人がいつも「楽しい」と思っていた日常をあっという間に「悲しい」「つらい」という気持ちに変えてしまうと思い、とても恐ろしいと感じました。



　また、昔は、火傷を負っている人は水を飲むと死んでしまうという噂があったそうです。 そのため、多くの人が水を飲めずに、亡くなってしまいました。ヒロシマ・ピース・ボランティアの方によると、平和記念公園には大きな噴水（祈りの泉）や池（平和の池）など、水に関する場所が数多くあり、それは、水が飲めずに亡くなってしまった人に、せめて今は、たくさんの水をあげようという意味が込められている、ということでした。



　二つめは、原爆による火の玉についてです。このことについては、平和記念資料館の被爆体験伝承講話で知りました。

　原爆による火の玉の温度は、約 7000～8000 度もあるそうです。これだけではどれだけ熱いか分かりづらかったけれど、太陽の表面温度が約 6000 度だと聞い



て、とても熱いんだなと思いました。その火の玉に当たってしまうと、一瞬で大火傷を負ってしまうほど熱いと聞いて、改めて原爆はとても強い威力があるのだと分かりました。

3 考えたこと

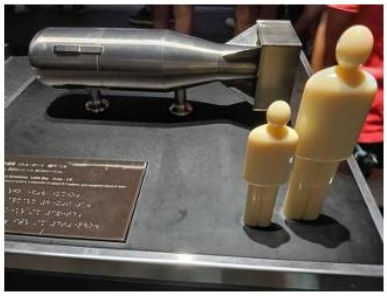
私は、戦争や原爆は自分には関係ないと思っていたけれど、広島に行き、資料館の展示や原爆ドーム、平和記念公園の「平和の灯」などを見て、もう戦争や原子爆弾を落とすことは、 絶対にやってはいけないということを実感しました。そして、そのことをみんなが知っておかなければならないということも学びました。





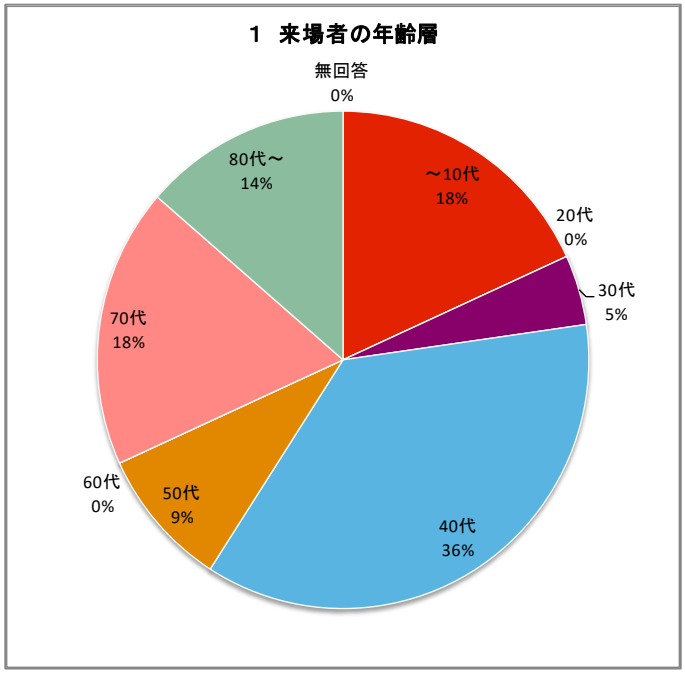
4 まとめ

私は、今回の平和派遣事業の経験を通して学んだことを、戦争は怖いと思っている友達に伝えて、「戦争は怖いものだけれど、戦争を学び、多くの人達が亡くなってしまったということを知り、平和について考えることはとても大切なこと」ということを伝えられたらいいなと思います。


来場者アンケート

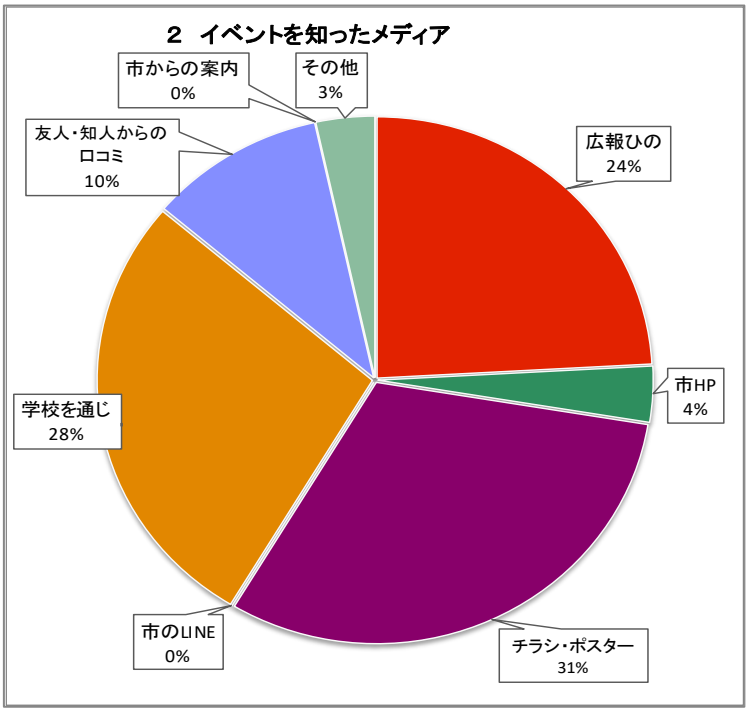
（１）御来場者の年齢層



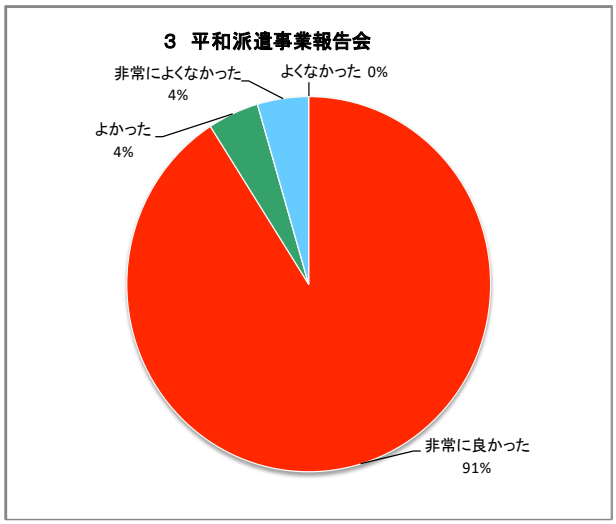
幅広い年代の方のご参加がありました。今後もあらゆる世代の方に来ていただけるようにしていきたいと思います。

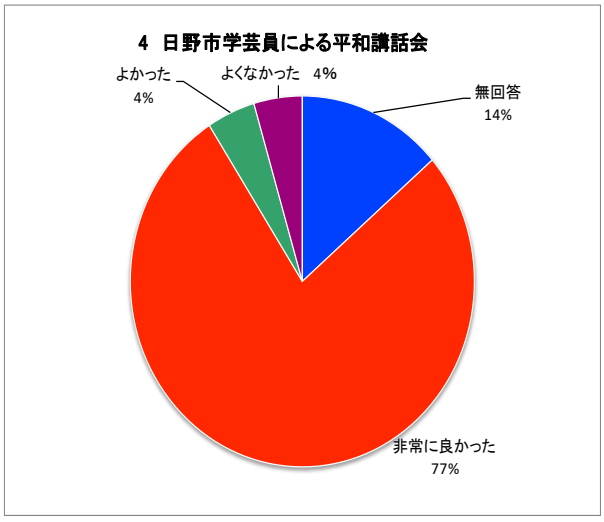
（２）イベントを知ったメディア

「広報ひの」や学校を通じて配布したチラシなど、色々なメディアで知ってご参加いただきました。



（３）感想





参加された多くの方が「よかった」、「非常によかった」と回答されており、大変好評でした。
自由記載の欄では、「学芸員の話がとてもわかりやすく、良かったです。特に親子が多く参加したこの時とても心にひびく話でした。」「子供たちのスピーチに感動いたしました。２度とあってはいけない戦争を目で見て訴えるエネルギーをもっと体験させてあげたいと思いました。」などのお声をいただきました。よくなかった意見としては「マイクの音量が小さく、会場に伝わらない」といったものがありましたので、改善を図ってまいります。
今後も当事業を継続してまいりたいと考えております。

日野市民憲章／日野市核兵器廃絶･平和都市宣言

日野市民憲章

昭和 58 年 1 月 1 日制定

わたくしたち日野市民は、多摩川・浅川につづく平野と丘陵の自然環境に恵まれたこのまちを、生活の中のふるさとと考え、みんなのしあわせのためにこの市民憲章を定めます。

1　元気に働き　いきいきとして　心ゆたかなまちをつくりましょう
1　手をつなぎ　ともに健康で　明るいまちをつくりましょう
1　自然を守り　緑と清流と太陽の　美しいまちをつくりましょう
1　人を大切にし　弱い人にも子どもにも　思いやりのあるまちをつくりましょう
1　文化をつちかい　うるおいのある　平和なまちをつくりましょう

日野市核兵器廃絶・平和都市宣言

昭和 57 年 10 月 8 日議決

巨大な量の核兵器は、米ソ両国の戦略兵器制限交渉などをもつてしても、もはやその拡大を止められない事態となつている。

ひとたび核兵器が使用されることになれば、その結果は全人類とその文明の滅亡であることはいうまでもない。

日野市は、核兵器が地球上から姿を消す日まで、その廃絶を叫び、平和が市民生活の基本であるとの理念のもとに、ここに日野市が核兵器廃絶・平和都市であることを宣言する。

令和 8 年度日野市平和事業　平和派遣事業成果報告書＜沖縄・長崎・広島＞

令和 8 年 10 月　発行

発　行　日野市企画部平和と人権課
東京都日野市多摩平 2 丁目 9 番地
多摩平の森ふれあい館
電話（042）584-2733

